

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-2590
第129号・平成12年6月1日

年表で読む

古平の歴史

《36》

■軽くなった海産税

北海道の産業は水産業が支配
して、明治初期の北海道で
は海産税が最も重要な租税でし
た。明治二年から同十四年まで
の平均を見ても、海産税は国税
の八十七%も占めていました。

明治十八年ころから、それま
での行成網に代わって角網が使
われるようになると、これまで
より大量の鯨が漁獲されるよう
になりました。

そうなると、今までのように
干し鯨を製造する労働力が足り
なくなり、生鯨で売られるようにな
りました。しかし、これまで生
鯨には税が無かったので、明治
十三年、開拓使では生鯨につい
ての税を定めました。

生 鯨 古平外八郡、収獲
高の一割を金納

胴 鯨 古平外八郡、収獲
高の一割六分

身欠鯨 同

明治二十年になり、水産税の
規則が改められてすべて金納に
なり、それまでの出港税もなく
なつて水産税は大きな減税とな
りました。(海産税の名称は物
産税となり水産税と変わった)

■『北海紀行』に見る鯨漁

明治六年、北海道・樺太を巡
回した林顕三(旧金沢藩士)の
『北海紀行』に、当時の鯨漁の
様子が書かれています。

「鯨(シ)は蝦夷地第一の産物
で、鯨漁が盛んになるとみんな
が走り回って、その賑やかなこ

とはたえようもない。昔から
これで多大な利益を得ていて、
アイヌは一年分の食料の助けに
なり、土地では二親(じふ)とも
言い伝えられている。

毎年、春の彼岸のころからお
およそ二十日間ほど漁をする。
これを走りといい、美味で上品
である。これからの二十日間の
漁を中鯨、後の三十五日を後鯨
といい、大体七十五日間漁をす
る。鯨漁の盛んなのは西海岸
で、小樽、高島が最高で岩内、
増毛がこれに次ぐ。東海岸では
根室を第一とするが魚体は小さ
い。鯨の来るときは海上が白く
泡立ち、海の色も変わる。鯨の
寄つて来る日限は場所によつて
違うが、前に言つたのは小樽郡
でのことである。

鯨は、西海岸では江差、松前
辺からだんだん上つて来るの
で、増毛以北では七日くらい遅
れる。

鯨漁には刺網、立(建)網が
あり、刺網は一人から三人でや
るので網の長さは一定していな
いが、おおよその網目の大きさは
二寸二分(六センチ)、長さ四間

三尺(八メートル)のものを五枚合わ
せ、網主の姓名を書いた浮きをつ
け、鯨の多いところに沈めて
置く。四年生の鯨はこれに掛か
り、以下の鯨ははずれる。網を
たぐつて舟に鯨を払い落とす。
漁期間に十四、五石をとり、こ
の漁は誰でもでき、税は一割六
分である。

立網は網目一寸(三センチ)で、二
十五間の網を五枚と八枚つない
だものをそれぞれ二組作つて枠
のようにし、底にも網を敷いて
袋のようにする。陸に向いた方
に口を開け、そこから陸に垣網
を引いて、鯨が口から中に入る
ようにする。

鯨が入ると二隻の船と漁夫が
十七、八人で袋の奥に追い込
む。大漁のときは一投(箱一)所
で五百石を獲るが、場所によつ
て良し悪しがある。中等の場所
で網・漁具に千金(円)、道具
や漁夫、食料、諸費に八百金、
漁夫の期間中の給料は二十一、
三金である。

身欠鯨一本(丸太を二四把一本
が一円五十銭である。以下略)
(原文を書き直してあります)

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【30】

大正六年

9/7 海は時化模様になつた、霧のような雨が降つて今日も出面の人は休む、三時ころから新しい座敷の障子張りをする、このごろは日が短くなつてきた、六時ごろランプに火を入れる

9/6 青エンドウます
ます下落、海産物はますます高い、例年の二倍である

9/7 雨は少しも休まず降っている、この雨で土場方面が大水になったというので大騒ぎ、役場や消防の人が出て大変のようだ

9/8 浜に出て見る、
 ㊦の浜に川崎船三隻が入港して
 いる、リンゴ積みの船だ、担ぎ
 の人たち十余人が積み込みをし
 ている、予の家の14号、26号、
 33号、キムスメなども積み込ま
 れている、リンゴが良かったの

で浜中は景気が良い、支店のでんぶん工場、三間に五間の建物が出来た、上の方へ行つて見ると高台一帯の平地に、六、七年生のリンゴの苗木が十四町も植えられている、十年もしたら随分出るだろう、見晴し良く、余

市通いの船も見える

$$\frac{9}{10}$$

朝夕は寒く単衣

(ひとえ)に半天がいるようになった、しかし一年中で一番気持ちいい時季だ、福津さんの畑のナシの苗木に大玉が十ぐらいなっている、家の丸ナシは種類が悪いので物にならぬ、売れようなら今秋は切らねばならぬ、店は今が一番暇なときだ、家族で新地の品田写真館へ写真を写しに行く、帰り正、傘に寄

ってご馳走になった

$$\frac{9}{12}$$

一雨ごとに寒く

なる、午後から雨が上がったので農園へ行く、伊三君がナシの棚をこしらえている、上の畑のリンゴ五、六本を切る、西瓜、アジ瓜などをもいで帰る

9/14 朝の涼風は単衣一枚ではひやひやする、イワシが寄って来ているというので引網やっている、畑では石を起す(次ページ・3段目へ続く)

アジ瓜などをもいで帰る

$$\frac{9}{14}$$

朝の涼風は単衣

日五十九

脱土
車座

[illegible]

孫たちと共に 生きる喜び

渡 辺 ハ ツ エ

不順な天候が続いておりますが、わが家の周りの水仙が黄色も鮮やかに今を盛りと咲き誇っています。チューリップも大きく蕾がふくらんで開花の出番を待っています。これらの花々に私は心を和ませもらっています。

進学に就職にとあわただしかった、今春、学校を卒業された皆さんも、今は希望と誇りを持ってそれぞれの分野で邁進されていることでしょう。がんばってください。

遠くに住む孫たちも、進学に進級にと希望にあふれる学業生活も、早や一か月余りたちました。

先日、高校生の孫から便りが届きました。

「中学校の三か年はあっという間に過ぎました。きつと高校の

三年間もそうだと思います。だから私は、後で悔いの残らないように有意義な三年間を過ごせるようにがんばります。」と、書かれていました。

顧みると、母親が二人目の出産のときには孫は二歳半でした。弟が生まれてもまだお姉ちゃんの自覚などはなく、赤ん坊を入浴させているときに、服を着たまま「みかちゃんも入る」と言って、母親と私を困らせたものでした。

自分を「みかちゃん」と言っていて愛きょうを振りまいていた孫が、いつの頃からか「わたし」と言うようになっていました。孫たちの成長を見てみると、月日の経つのがとても早く感じられるあの日、あの頃でした。当時、テレホンショッピング（11ページ上段へ続く）

（前ページから続く）

こしたり拾ったりしている、手入れをすると立派な畑になる、十四号を七十斤（四十二キロ）ほどもいで、一箱を古平丸で小樽へ送った、五時に帰るが足が冷えた、この間まで氷水などと言っていたのに季節の変わるのは早いものだ。

—— 全文を掲載 ——

九月十五日 快晴

朝夕の寒いこと、実に手足が



農園第一のリンゴの樹、12号の前で記念撮影（大正6.9.15）

つめたい程だ。今朝六時に起きた。浜へ出て見る。富丸は五、六日前から売られて、今は発動機ばかり。富丸でさえ三万円とかに売れたとのこと。何と汽船成金の出来るのも無理ない。イカ漁漸く五十位あてた。この日農園第一の樹を写真に写すことにし、品田さんから来て貰う。予も洋服の軽装で行く、妻、幸、文、トミ、吉も来る、一行十三名。十二号の前に並び、千斤以上もなつて色づいた、農園第一のリンゴを背景として写した。良い記念になるだろう。リンゴもこんなになると何よりよいものだ。おか家でナシ、リンゴの馳走ある。小林ばーさん等も見物に来る。中食は家から持ってくる。板倉内でワラジ掛けで食う。おいしいことだ。午後、袋はずしやる。四時頃、積丹余別から刺網買い来たとて自転車で帰る。（以下 次号へ続く）

北海道・樺太・千島を探険

4

最上徳内

蝦夷草紙

を読んでみましょう

▼松前藩のめでたい慣習

松前から西北へ百二十キロほど離れたところに、見市（けんいち）という村があって、ここに代々岩之助という百姓がおりました。ふだんから不精髭（ぶしょうひげ）を生やしもみあげも剃らないので、まわりのアイヌの人たちと間違えられるほどでした。毎年、正月七日にはアイヌの人たちが松前の藩主の前に出て、むしろの上に座り、濁酒（にごりざけ）を受けるのが例でしたが、彼はその中にまじって濁酒を受けていました。これは新年恒例のおめでたい行事でした。

松前藩には地下侍（じげさむらい）身分の低い侍（侍）というのがあります。例年、藩主へのお歳暮には菅（スゲ）や菰（こも）を献上するのが常でした。これは昔、蝦夷を征伐したとき

に小屋を建てるのに土地の者が材料として菅や菰を差し出し、その時の戦いで勝利を得たことから、縁起をかついでおめでたいものとされているからです。

また、上野国（かみのくに）上の国（国）という村からは、ヤナギの木を割って、厚さ一・五センチ、幅三センチ、長さ三十五センチほどにしたものを十本ずつすだれのように編み、ご楊枝木（ごようじぎ）と名付けて、十枚あて献上するのが習わしになっています。

十一月十三日には箸削りという儀式があって、その日には藩主から家中一同に料理と酒が下されるということです。

▼安着を伝える狼煙

藩主が江戸へ向かうときは、長者丸・貞松丸の二隻に乗って松前を出帆し、津軽領の三馬屋（みんまや）三馬屋（三馬）渡ります

海上無事に三馬屋の港に到着すると、宇鉄村の清八という獵師が合図の狼煙（のろし）を上げて、松前の地に知らせます。この狼煙を見ると松前領の白上岬（白神岬）では、この狼煙を見て合図の篝火（かがりび）を焚き、これを城内に知らせるのです。この狼煙は津軽藩で前もって準備しておいたもので、清八には、松前藩主から錢二百貫文がほうびとして与えられます。

▼松前は火災・盗賊が少ない

松前でも火事があれば、藩主がみずから馬にまたがって火事場に駆け出すので、これを見て火消しや家中の者たちは、先を争って火事場に駆けつけるのです。これを見て火消し役はもちろんのこと、家中の者はわれ後れじと火事場に駆けつけ、懸命に消火に当たるので火の広がることも少なかったのです。このようなことから、家中の者や町の人々は藩主のご仁政だとはめ讃えています。

また、藩主は鷹狩りや川遊びが好きで、それで城下から離れた及部村というところに仮屋を

建て、宴を開いたり、鷹狩りや川で網を打ったりして楽しんでいました。その後何年かして、私が松前に行ったとき及部村を通りましたが、仮屋では主従が賑やかに楽しんでいました。

▼鯨漁を占う

松前では、節分でまいいた豆をとっておいて、正月十五日（旧暦）の夜に、炉（ろ）の灰の上に円く並べ、豆の一つ一つに村落の名前をつけて、その焼け具合を見るのです。やがて豆が焼けて黒くなったり、白い灰になったり、色によってその村の鯨の豊凶を判断します。この地では鯨漁がすべてなので、このようなことに心をつかうようです。鯨漁に使う船や網は、他国の鉄（くわ）に、漁場は田畑と同じなのです。荒れ地を開いたり、植林に金を貸す者はいませんが、漁業をやるという者には容易に金銭を貸します。ここでは百姓といっても実は皆漁師で、農業を家業としている者は無く、自家用として耕作をしているのがほとんどです。

断章小説 「ふるさと遙か」

慟哭の旅路 (二)

Ⅶ

吉川 義雄

「知らんだろうかねえ……」と友野は、給仕に來た女中に尋ねた。

この旅館に落ち着くまでに、彼はこの町を尋ね歩き、木田の住んでいたはずの住所には、もう尋ねる相手のいないことを知っていた。

彼と木田は海軍の同年兵で、なぜか互いにウマが合い、戦火の中を仲良く逃げ回って生き延びた、ひととき貴重な青春の体験を共にした、得難い友人であった。

戦後、東京だと思っていた木田から、北海道のこの町に職を得ていることを知らされ、互いに逢いたいと便りに書きながら混乱期の二人の境遇は、そう易々と再会させぬまま数年が過ぎていた。

夕食の膳を前にして、次第に

熱っぽくなつて來た友野の話を聞いていた女中が、途中で「あッ……」と声を上げて、逆にさまたまなことを彼に尋ね出した。そして、またも頓狂な声を出して友野に告げた。

「お客さんッ、その人の奥さんを私知ってる。それも、すぐ前のお店で働いているんよ」

事の急転に、彼は箸を投げるようにして宿を飛び出した。

戦後間もないころの飲み屋の形態は、友野の住む札幌でも、場末はなおのこと、見栄えのする店でも、退廃の影は色濃くつきまとつていた。

彼が、今飛び込んだ店も、真ん中の通路を挟んで両側に小部屋があり、その入口は戦時中の遮光幕と同じもので遮断され、薄暗い部屋には、長椅子と頑固にできた木の台があるだけで、

密室に近いものだった。

木田の妻の名は、文通で知ってはいたが、この店での名は宿の女中も知らなかったから、彼は店に入るとき、自分の名前と木田の妻の本名を繰り返して告げて、彼女を指名しておいた。

「あアお客さん、前にお合いましたよネー」

嬌声をあげて入つて來た和服の女性が、いきなり友野の横に密着して座り、彼の首に手をまきつけてきた。

木田の妻と逢つて彼の消息を知り、友情を隔てていた時間を一気に取り戻そうと氣負つて來た友野は、この店に郁子さんという人が働いているはずだ。その人は俺の大事な友達の奥さんで、どうしても逢いたいんだ。彼はまたも場違いの真剣さで、その女性に訴えた。

始めは、茶化すような半畳を入れながら、彼の言葉を聞き流していた彼女が、途中で今までの酔態をびたりと止め、

「もしかしたら……」と、彼の顔をまじまじと見て、一呼吸してから、

「友野さん？」と、尋ねた。そうだと答えると、

「ごめんなさいッ。友野さんだったんですね。私、郁子です。本当にごめんなさい。こんな恥ずかしい姿を友野さんに見せてしまつて」と、彼女は消え入るように彼に詫びた。

「木田と友野さんの友情は、暗記できるほど聞かされました。あんな命がけの時でも……今、私なんか、木田の入院費をつくるだけで精いっぱい。人を護るって大変です。負けそう……」

彼女は、友野が慌てて聞く前に、それを先回りして言った。

「木田は、三年ほど前から結核で入院しています。男の子二人と私はこの町の実家にいます。そうだ。この時間ですが療養所に長距離電話を入れます。木田が喜ぶでしょう。」

店から遠い、地方の療養所への電話は、夜の深さの中で、何回かけ直しの努力をしても通じなかった。

札幌の友野に、彼女から数日後に木田の死が知らされた。

(この稿終り)

霊場

観音滝ものがたり

〈9〉

(6)

No. 129

い む か た せ

観音像の設置が始まる 三十三体の観音が決まりましたが、この三十三という数字の意味は、観音さまがこの世に利益を施してくださるときに、三十三のそれぞれ違った姿に身を変えて、人々を救ってくださるということにちなんだものです。

観世音菩薩を安置した有名な西国三十三所にならって、各地に三十三所と呼ばれるお寺があります。これも観音さまの三十三の功德にあやかっただけです。

三十三所は、三十三じよとも読みますが、三十三箇所・三十三番・三十三番札所とも呼ばれています。

北海道にも三十三観音霊場といわれる、観世音菩薩を安置したお寺があります。

第一番は禅源寺に關係するご

詠歌の団体一同、最後の第三十三番は霊場建設の発起人でもあった祝聖会がこれを見て、最初の建設は昭和六年十月十七日、霊場のお祭りの日を記念して開眼式が行われました。

人気のある 数ある仏像の中の観音さん で、昔から多くの人によく知られ、人気の高いのが観世音菩薩や地藏菩薩で、観音さん、地藏さんの愛称で親しまれています。

日本には今から千五百年ほども前に伝わって来て、国を治め国の利益を護る菩薩として、当時は天皇や貴族が信仰していましたが、その後、次第にもっと身近な日常生活の中で危難を救い、ご利益(ごやく)を与えてくれる菩薩として民衆に親しまれるようになりました。

観音滝霊場も、最初は一体の音像をまつただけでしたが、

参拝に集まった人たちの信仰心が高まり、祈願をする人たちによって観音像三十三体(ここに安置されたのは三十体)が奉納されたものと考えられます。

観音像の作者は分かっています。が、多くは当時町内にいたという

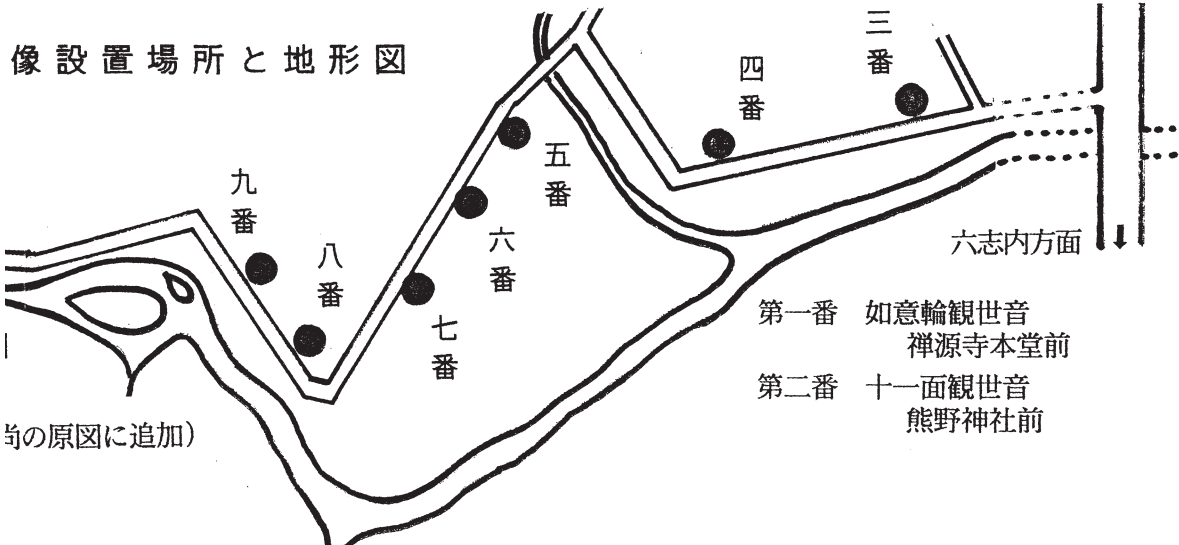
古平町
浄水場

現在の道道・浜町方面

六志内方面

第一番 如意輪観世音
禅源寺本堂前
第二番 十一面観世音
熊野神社前

像設置場所と地形図



図の原図に追加)

観音滝三十三体観世音像

第一番 如意輪観世音 座像

古平御詠歌講中

昭和九年八月十八日開眼式

第二番 十一面観世音 立像

泥の木連中地藏講中

昭和八年十月十七日開眼式

第三番 千手観世音 立像

秋田平左衛門・秋田きく

昭和七年十月十七日開眼式

第四番 千手観世音 立像

原田イソ

昭和八年八月二十七日開眼式

第五番 千手観世音 座像

高橋大八

昭和七年十月十八日開眼式

第六番 如意輪観世音 座像

関川栄吉・関川サワ

昭和八年十月十七日開眼式

第七番 如意輪観世音 座像

浜町御詠歌連中

八幡昇二・八幡キク

昭和十年十月十七日開眼式

第九番 不空羂索八目観世音 座像

立像

第十一番 準胝観世音 座像

大黒屋藤田秀雄

昭和八年十月十八日開眼式

第十二番 千手観世音 座像

横山 ほか

昭和十一年十月十七日開眼式

第十三番 二臂如意輪観世音 座像

漁夫供給組合

昭和八年八月二十七日開眼式

第十四番 如意輪観世音 座像

室中村吉蔵

昭和九年十月十七日開眼式

第十五番 十一面観世音 立像

西島留吉・堀内定八

立像

第十六番 楊柳千手観世音 立像

慈眼会

昭和八年八月二十七日開眼式

第十七番 十一面観世音 立像

山田勇三 外二十一名

昭和九年十一月二日開眼式

第十八番 千手観世音 立像

北浜嘉雄 昭和二十八年

第十九番 千手観世音 立像

公園部落会

昭和八年八月二十七日開眼式

第三番 千手観世音 立像

青山雅雄

昭和二十八年五月十七日開眼式

第三番 千手観音 立像

第三番 十一面観音 立像

第三番 十一面観音 立像

第三番 千手観世音 立像

第三番 如意輪観世音 立像

第三番 聖観世音 立像

禅源寺老婆連中

昭和七年十月二十七日開眼式

第九番 馬頭観世音 座像

第三番 千手観世音 立像

永井ハツ

昭和九年十月十七日開眼式

第三番 千手観世音 立像

新地方面御詠歌連中

第三番 十一面観世音 立像

祝聖会

昭和六年十月十七日開眼式

鴨居木御詠歌連中

昭和二十九年四月三十日開眼式

お寺詣り

竹内コト

私が子どものころは、母が禅源寺の手伝いに出かけるとき一緒に詣りに行きました。彼岸の中日には、よくお寺のご飯をいただいたものです。

そのころのお寺では、一人ずつ長い足の朱塗りのお膳で、お椀などもすべて朱塗りのものでした。そのお膳でご飯を食べら

れるのが楽しみで、それで母についてお寺に行つたのです。

本堂がいっぱいになるほどの参詣人で、一番膳とか二番、三番膳とかいって、最初のお膳には住職さんや総代などの役員さんが座っていました。本堂にず

らりと並んだお膳は、今の温泉旅館の大広間を思い出します。

春、桜の咲くころの花まつり

(灌仏会)には、各お寺で甘茶を沸かします。お釈迦さまの誕生を祝いその像に甘茶をかける行事ですが、参詣人は沸かした甘茶を飲み、お花を持って本堂前を輪をつくって回ります。子どもたちもびんを持って来てはその甘茶をもらって帰ります。

また、お寺詣りのもう一つの楽しみは、境内にいろんな出店が並ぶことです。駄菓子屋さんから、おもちゃ屋さん、農家の人たちのとうきびや、枝豆を売

る店まであって賑やかでした。

私はとうきびが大好きだったので、母に買ってもらつてはかじりついていました。今のとうきびはみんな黄色ですが、むかしは黄色のほかに黒や白、まだらのものもあつて、味も良かったように思います。

私は今も、以前、鯉場で使つていた「八寸」というお膳でご飯を食べています。高さが八寸あるので俗にそう呼んでいるようですが、ときどき子どものころのことを思い出します。

遙かなる故郷の思い出

わが闘病日記

橘 義 春

くろだ医院からの帰り道、何か心の中に引つかかるものがある。あの腸のロープ状のねじれは何だったんだろうか。まさか、腸が癒着しているのではないだろうかなどと思い、家に帰るまで落ち着かなかった。

六月二十五日早朝、バスで杏林大学病院へ行く。くろだ先生の紹介状と、レントゲンフィルムの入った封筒を受付へ提出する。十一時ころ呼び出しがあり、跡見教授の診察室へ入る。

先生は大変穏やかな人で、終始にこにこしていて、くろだ先生の紹介状とレントゲンフィルムを見ながら、いろいろと質問があった。

「何か、お腹にしこりのようなものを感じませんか。」
「何年も前からお腹のへそのあ

たりの左側に、さつまいもかバナナのようなものが横たわっているような感じがあります。お腹の肉と皮をいっしょにつまむとができます。痛くありません。胃袋の一部のような感じがします。」と言ったら、先生がにこにこしながら、

「そうか、そうか。」
と言われ、何か納得されたようである。

跡見先生は、くろだ先生からの私の病気に對する所見とレントゲンフィルムを見て、ほぼ診断は決まったようだった。

「ともかく入院して、検査をしてみましょう。今日帰りに入院の続きをしてください。それから、くろだ先生へ手紙を書きましたので届けてください。くろだ先生によりしくお伝えくだ

さい。」

と、言われた。親切な先生だ。

入院の続きはしたが、その後なかなか病室が空かなくて、二週間ほど待ってやっと病室が決まった。

七月十六日、家内に付き添われてタクシーで杏林大学病院へ行き、入院の続きを完了し、第一外科の三病棟・五階A3500室へ入った。

部屋は八人部屋で、それぞれの病気持ちで多彩な顔ぶれであったが、すぐに皆さんと親しくなった。

私の主治医は、柱先生と女医の植木先生と決まった。柱先生はいつもにこにこしていて優しい先生で、女医の植木先生は新米のホヤホヤで、注射は下手だったが一生懸命働く先生で、いつも病院を駆け回っているようだ。私も今日から入院の第一日が始まる。

七月十七日、柱先生から『入院診察計画書』なるものを渡される。その内容は、「病名」下行結腸腫瘍（下行結腸に大きな腫瘍があり、腸管内腔が狭窄し

ている状態で、放置すると、近い将来腸閉塞となる可能性が高い）（二、三週間である）

「治療計画」手術をするに当たり必要な検査、血液検査（H I U 抗体の測定）、超音波・X線・CT検査・内視鏡検査・注腸検査・腎盂尿管膀胱造影検査・その他、

「手術の内容及び日程」狭窄している部分を切除して各々を吻合

「推定される入院期間」術後約二週間

「看護計画」(1)検査、処置の説明、(2)手術前後の観察・処置・異常の早期発見、(3)退院に向けての指導、などとなっている。

この入院診断計画書を見ると、病名は下行結腸腫瘍となっており、腸に瘤状のおできが出来ていることになる。そのおできは何か。ガンではないのか、小さなポリープか。くろだ先生から渡されたレントゲンフィルムには、おできと思われる大きな瘤は写っていないかったようだ
（次ページ下段へ続く）

遠い昔の 古平の浜辺

福 井 幸 平

子どもの頃、よく前浜でゴリをすくったり、時化あとに打ち上げられたハタハタのブリッコを食べた懐かしい思い出がある。ずいぶんと海の様子も変わったものだ。木を切り尽くしたはねつ返りかも知れない。

磯やけの海がかなしい。孫たちに残す自然も無く、まことに残念なことである。

三尺の日本手ぬぐいですくったゴリ獲り、砂にまみれたブリッコをカリカリとかじった少年時代も遠くなった。寄り若布、昆布もまた然り。

誰に教わったのか 秋田名物八森ハタハタ男鹿では男鹿ブリコ、古平だってハタハタが獲れたんだよ！

今の古平橋では毛ガニが山ほど、前浜でも獲れた。今の浜（今の大和田さんの前浜）では

虫岩があつて、犬かき泳ぎでも大きなツブやナマコも獲れた。丑（うし）の日には、丸山岬から沢江の浜までかがり火をたいて、その見事な眺めは忘れられない。

海へ行けばヒヨリ貝、カキ、アワビ、ガンゼ、ノナなどなど、食べるだけなら不自由なかった。木を植え、森を再生させて、いつかまた鯨の来ることを信じて、あの世からのぞいてみたいもんだ。

訂正で申しわけありません
橘義春さんの『わが闘病日記』で名前がおちております。

先月号で、吉川義雄さんの断章小説『反抗の軍歴』は、標題が『慟哭の旅路』（二）でした。お詫びして訂正いたします。

（3ページ・2段目から続く）
で、団地サイズの鯉のぼりを買って孫の初節句のお祝いに贈りました。

数日後に息子から礼状に添えて、団地のベランダで、風に乗ってゆうゆうと泳いでいる鯉のぼりの写真が送られて来ました。私たちは息子夫婦以上の感激でその写真を見ていました。

孫たちは、健康で明るく幼児期を過ごして学齢に達し、ピッカピカの一年生になって、人生最初の校門をくぐって両親を感激させました。

私も元気でいて、孫たちの将来を見守りたいものと思っています。

（前ページ下段から続く）

が、大腸の一部にロープ状のねじれていた箇所があった。それに、手術後の入院期間が二週間というのも短か過ぎる。もしガンだったら、短くても五週間か六週間は入院するのではないかと、自分に都合のよいように勝手な解釈をしていた。午前採血検査、午後、検尿・検便

七月十八日、採血検査、CT検査
七月二十一日、下剤（塩水のような）一・五リットルほど飲んだが、便があまり出ない。

本日から、食事と水は一切禁止となり、全部点滴で補給となる。

（続く）

川 柳

石 井 愛 子
空が亡き小淵前首相散り悲し
人生の雫（しずく）の如く散りたきし
母の日と案じてくれる子の有りて
喜寿過ぎて周り気になる物ばかり
宅急便 親子の絆 太くする
自分史を綴れば悔いがページ埋め

渡 辺 ハ ツ エ

菅原節子さんと追悼して

古平町岬短歌会

たのしみし歌会にも出れず癒えぬまま君ゆき給ふ亡夫(つま)のみ許へ
 やさしさと笑顔漲る菅原氏の遺影に小春の日ざし和らぐ
 お浄土への道を思はず祭壇の花に囲まれ遺影は微笑す
 一月の詠草を終に逝きし君さ庭のサフラン蕾ふふむに
 現世(うつしよ)は今し芽吹き季なるに友は逝きます向ふの国へ
 艶やかな姿すこやかに踊りたる菅原さんの冥福を祈る
 何時の日も濃き人生を歩み来し君の生き方胸深く刻み
 外来で偶然会ひしが最後にて桜を待たず君逝きたまふ
 にこやかな君の面影しのびつつ見上げる空に雲一つ浮く
 穏やかな君のやさしさ込められし豆の輕鴨形見になりぬ
 咲き匂ふ花待たでして君逝きぬ佳き短歌(うた)あまたわれらに遺して

池田 テル
 魚屋 友子
 奥山 きよみ
 榊 佳代
 鈴木 時子
 竹内 コト
 田中 香苗
 丹後 初江
 東 美知
 堀 典子
 山口 スエ

古平ホトトギス会

鬼子母神まつる法寺花盛り
 山 悦子
 ふきのとう苦し旨しと絵手紙に
 越野 敏雄
 庭先を歩いて十歩春の川
 大和田 絵伊
 目の手術通院ながき四月尽

福井 幸平
 麻酔さめ看取る妻の手あたゝかし
 関 勝志
 鶯の声の近きや藪のぞく
 よしざきり
 歩を止むる春到来の花舗に佇つ
 仲谷 比呂古
 薫風の山腹過ぐる車窓かな
 越野 清治
 春日なか繋がれし艇みな眩し
 室谷 弘子
 蝦夷リスの駆け登り行く五月かな